

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Memoria de Kobegaidai

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹谷, 和之 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2557

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



神戸市外大の思い出

竹谷和之

在職期間中の思い出の中から、記憶の中心となるものを抽出して簡単に触れてみたいと思う。

体育からスポーツ方法へ

1983 年 4 月に体育教員として六甲学舎に着任してから 37 年が経過した。この間キャンパスは現在の学園都市へ移転し、また大学院博士課程の新設、大学法人化など時代の趨勢に合わせて変容してきている。外国語大学は語学が中心に置かれ、またそれをツールとして学ぶ体制が整備されてきた。

私の担当した体育もスポーツ方法と名称を変更し、小中高の一連の体育科教育とは異なる内容を模索してきた。小中学校では授業の多くが規律と体力及び運動スキルを中心に据えられ、楽しさは付随的であり、ドロップ・アウトを多数輩出もした。「体罰」や「体育座り」で行動制限をかけられ、知らぬ間に身体に染みついている人も多いと思う。つまり優劣判別装置と変化したのである。

週一回の授業は OED などに述べられている sport の定義を身体を通して理解するようにカリキュラムを立て、競争原理と共生原理とした。とくに共生原理のスポーツは、学生にとって違和感が強かったように思う。それは現在でも変わらない。なぜなら大学に入るまではすべて競争原理のスポーツで占められてきており、それ以外はスポーツではないと言われてきたからである。

外大生が教職志望の場合、通過しなくてはならない科目はスポーツ方法（体育）である。しかし技術習得が中心の、競争だけではこれまでと同じように義務で実技をこなすしかない。ではどうすればよいか。まず自分で種目を選択し、スポーツの楽しさの体験から入り、そしてレベルアップをしなければよい、という考えを中心にした。傍から見れば、ゆるいスポーツと捉えられるかもしれないが、受講生の嬉々として積極的に取り組む姿をみれば説

明は不要であろう。これはピエール・ルジャンドルの「第三項」を具現化したものである。加えて、学外で非競争的スポーツ（トレッキング、ダイビング）も導入し現在に至っている。

スポーツ文化論

スポーツ文化研究の分野では、1980年代半ばまでスポーツ実践学やスポーツ科学が中心であった。スポーツ実践学は、かつてアスリートだった人などが自らの経験をベースとした選手育成の指導方法論である。これは現在も有効であり、必ずしも第一線で活躍していない人でも名伯楽と呼ばれるような指導者も輩出している。アスリート個人に合致した方法の適用は、工夫を積み重ねて獲得されるものである。身体論に直結するこの方法は解剖学や心理学も修めておく必要がある。

一方、スポーツ科学は、日本の体育学会などでは徐々に自然科学のことを言うようになり、人文学などは除外されてきた。運動生理学やバイオメカニクスなど運動パフォーマンスについての情報を数値化し、運動を評価する学問である。数値と運動の関係は把握できるが、その後はスポーツ実践学と連携される必要がある。

私が研究対象としてきたのは、上の二つとはことなり、文化としてのスポーツである。オリンピック種目としての近代スポーツはもちろん、各地域や共同体に伝承されているスポーツを対象とした。それを進めるためには、スポーツ史やスポーツ人類学の方法を用いる必要があった。この研究の流れは1980年代半ば頃より顕在化し、スポーツ史学会（1986年）、日本スポーツ人類学会（1998年、日本体育学会スポーツ人類学専門分科会設立 1988年から独立）という文化としてスポーツを把握する研究である。これまで民俗学や民族学、あるいは文化人類学でスポーツを対象とすることは見られたが、スポーツ自体やそれを取り巻く社会を対象としたものは少なかった。しかし、山口昌男『文化と両義性(1975年初版)』の「中心と周縁」という視点がスポーツ史関係者に与えた影響は大きかった。

このことは筆者が1983年本学への奉職時から、当時奈良教育大学稲垣正浩先生（本学客員教授 2009～2012年）より折に触れて指導を受けた。そして1986年3月にバスクへ現地調査に赴いたのである。

バスク伝統スポーツ

以来、個人的な渡西で研究継続してきたが、科研費獲得（基盤研究 C1996～1998年、基盤研究 B2004～2007年）でより広範囲の継続的研究が可能とな

った。その時にバスク大学身体活動・スポーツ科学部エチェベステ教授と出会い、共同研究者としてバスク語のサポートを受けながらバスク全土を踏査した。ここで注意したことは、バスク伝統スポーツの参与観察のみではなく、観察的参加 (observative participation)、つまり実際に体験することであった。もちろん体験は限定的であったが、チャンピオンと競争するのではなく、身体技法とその工夫、何よりも選手たちの視野や思考に触れ、一方で観客として地元の選手を応援する人々との交流であった。これらは守護聖人祭とセットであるため、何処に行っても見知らぬ日本人がフィールド調査するのは容易ではなく、私はカメラを携えた異邦人としての見世物でもあった。

そしてもう一人バスク州立中高等学校マルティン・ボッシュ教諭との縁により、行動範囲が格段に広がった。彼の紹介で知り合った人々は市井の人も含め 200 名を越える。氏はバスク舞踊の名手で音楽にも精通しており、筆者の要求を完全な形で実現してくれた。とくに、フランコ独裁時代に、バスク語禁止令に抗して母親たちが交代して、各家庭の一室でバスク語、歌謡およびダンスの授業を継続したこと、教会の神父が見張りをしてバスク文化継承に協力したこと、バスク語会話ができたカフェ、そしてバスク伝統スポーツが禁止令から免れて観戦できたこと（もちろん監視付）、などスペイン市民戦争前後の情報が彼の近親者から直接聞いたことは、人々とスポーツ文化とのかかわり及びそれを取り巻くバスク社会について再考するきっかけを与えてくれた。

アプネア（素潜り）の可能性

素潜りは「息を吐き、息を吸い、そして吐き出すまでの間に世界がある」と言ったのはジャック・マイヨール(1929-2001)である。彼のトレーニングは瞑想系身体技法であり、近代スポーツではほとんど採用されなかった。しかし彼は、高圧化のスポーツ、アプネアには身体的トレーニングはもちろんのこと、精神的トレーニング、つまり無思考へとつながる集中力がもっとも重要であるとした。ヨガや禅を学び、その呼吸法を取り入れ、身体が自由に動く方法を模索した。つまり、最小のエネルギーを使用して、最大の成果を達成するというものであった。近年は無意識に直結する「ゾーン」と呼ばれ、最高のパフォーマンスを発揮している状態をいうようになった。その後ジャックは第一線から身を引き、自然理解あるいは海中からの思考を前面に押し出して独自の思想を展開した。

筆者はこの身体技法にスポーツ文化の新たな地平を見た。それは最大出力の最大効果を狙う近代スポーツではなく、「水に溶ける身体」の世界につながる

るスポーツとは何か、である。「地球の歯車になる」「自然の一部になる」など奇をてらうような表現が本質を言い当てているのである。つまり他者へのまなざし、あるいは他者との交信が「と共にある」というジャン＝リュック・ナンシーの言葉へと到達するのは必然であった。また、「分割-分有 *partage*」と言いかえても良い。互いに手を差し出して握手するとき、相手の手を握っているのか、それとも相手から握られているのか、である。これは他者存在が前提とされるときに浮上する思考である。稲垣は、ジャックより前に他者を第一とするスポーツ文化を「他者肯定のスポーツ文化」と呼び、勝利第一主義の「自己肯定のスポーツ文化」と区別していた。

これらのことから、世界の伝統スポーツが一举に視野に入ってきた。可能な限り内外の伝統スポーツを調査・参加して「紐帯」としての機能や、担い手たちの漠然とした捉え方を表記しようとしたが、言葉が見つからない。その暗中模索に方向性を示唆したのが、文化人類学者今福龍太氏（当時札幌大学教授）である。本学で開催した第14回スポーツ史学会大会シンポジウム（2000年11月26日大ホール）にジャック・マイヨールや稲垣正浩先生とともに今福氏を招聘した。彼の鋭い感性は私にとっても刺激になり、その詩的表現は追隨を許さない圧倒的力を持っていた。

最後に西谷修氏（本学客員教授2014年～現在）の哲学的思考に現在も影響を受けている。2012年に本学で開催した「神戸市外国語大学・バス科大学 第2回国際セミナー グローバリゼーションと伝統スポーツ」の「グローバル化と身体の方行」では、近代社会で創造されたスポーツ文化は近代化の刻印を内包されたまま現在に至っており国民共同体や産業と不可分の存在であるが、今後伝統スポーツとの折り合いの中で文化変容していく、と主張された。そして伝統スポーツは、生活・地域・連帯の要でもあるとされた。氏の思考は哲学、歴史、宗教、死、医療、などから現代社会へと常に直結させ、クロスオーバーするゾーンに積極的に踏み込んでいく。

Covid-19 禍で露呈した問題群の中で、「じか」の必要性がさらに増加したのではないかと。広義のスポーツはそれに応える要素を内包していると思う。そして、スポーツとは何かという大前提へ回帰していくのである。

神戸市外大に着任早々、ある先生から、「sport は翻訳できないのかね」と質問を受けた。適切な日本語訳はないので、そのまま使用していると回答したことを今でも覚えている。まだ途上であることを報告したいのだが、鬼籍に入られている。もう少し此岸で修行して、私が彼岸へ行った際に説明しようと思う。